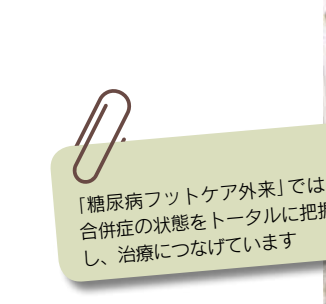




ワンストップ診療で 糖尿病の合併症を予防

患者さんの治療方針などを共有するため、医師・看護師に加え、管理栄養士・理学療法士・多診療科の医師などが集結

糖尿病コンPLICATIONセンター



「糖尿病フットケア外来」では、合併症の状態をトータルに把握し、治療につなげています



糖尿病コンPLICATIONセンター長
よこてこうたろう
横手幸太郎

糖尿病は、単に血糖値を下げるだけではなく、将来目が見えなくなったり、心筋梗塞になったりしないよう、合併症（コンPLICATION）を防ぐ治療がとても重要です。

診療科や職種が連携して患者さんの全身を診ています

糖尿病・代謝・内分泌内科 准教授
たけもと みのる
竹本 稔 (上部集合写真の前列中央)

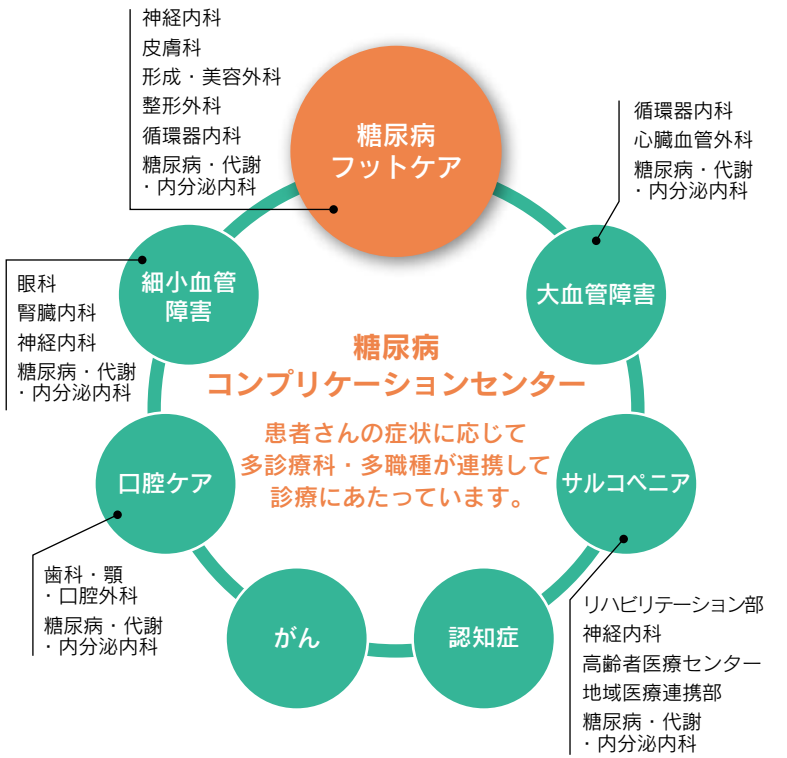
日本の糖尿病患者数は現在、900万人を超え、50歳以上の4人に1人が罹患しています。その中の多くの患者さんは、網膜症や腎症、神経障害、心筋梗塞、脳梗塞などの合併症を患い、機能障害や症状悪化の不安などに直面しています。しかし、合併症を制圧できれば、糖尿病であっても、健康な人と変わらない生活の質（QOL）や寿命を確保することが期待できるのです。

そこで当院では、糖尿病の合併症に苦しむ患者さんが十分な治療を受けられるよう、2014年7月に「糖尿病コンPLICATIONセンター」をオープン。さまざまな医療のプロフェッショナルが揃う千葉大学病院の特性を生かし、多診療科・

多職種が連携して総合的な診療と予防指導を行っています。

さらに、新たな試みとして、皮膚科、循環器内科、整形外科、形成・美容外科、看護師が連携した「糖尿病フットケア外来」を2014年7月に新設。糖尿病患者さんの約4人に1人は「下肢のしびれ」を感じており、足（フット）を診察することが、合併症の状態をトータルに把握するために重要となってきます。当院では、フットケアを入り口として「全身合併症」の総合的な診療と早期治療の実現につなげています。

また、糖尿病合併症を予防・管理していくためには運動も必要です。そこでセントラルスポーツ株式会社と提携し、患者さんへ適切な運動プログラムを提供するなど、医療とスポーツの両面から健康長寿をサポートしていきます。



漢方診療を自由診療で行っています

自然との調和をめざした東洋医学

ご存じですか？緑豊かな千葉大学柏の葉キャンパスに、漢方と鍼灸治療を自由診療で行う千葉大学病院の診療所があります。

「人間は自然の一部」東洋医学の考え方で

東洋医学ってどんな考え方なのですか——。東洋医学では「人間は自然の一部であり、体のしくみも自然界の動きと同じくしている」と捉えられています。また、「食と薬には連続性があり、どちらも健康の維持に重要な役割を果たしている」と考えられています。

柏市にある千葉大学柏の葉診療所は、緑豊かな千葉大学柏の葉キャンパスの環境を生かし、「自然と健康」「医食同源」の考え方をもとに漢方診療を実践。より高い薬効が期待できる良質な生薬(植物や動物、鉱物などの天然物を乾燥など簡単に加工したもの)を用いています。

保険診療で処方できない生薬も使用

当診療所は、自由診療で漢方診療を行っています。その理由は、①現在の保険診療のしくみでは高品質な生薬を提供することが難しいこと、②保険診療では処方できない生薬も使用することが可能なため、幅広い病態や体調不良への治療が可能などによります。保険診療に比べ、自由度の高い診療が可能のため、より患者さんに合ったオーダーメイド治療をご提供しています。また、煎じ薬の煎じ代行も行っています。

また、漢方診療と鍼灸治療の両面からアプローチできる体制を生かし、鍼灸の即効性と漢方の持続性を連携させて患者さんをフォローしています。

千葉大学柏の葉診療所
所長
かつの たつろう
勝野達郎



研究と人材育成にも注力

漢方治療の研究や人材育成にも、注力しています。将来の生薬の安全性の向上や安定供給の研究を進めるほか、千葉大学の学生への教育にも取り組んでいます。西洋医学と東洋医学の両方を知っておく重要性から医学部・薬学部・園芸学部の学生への講義を実施。研究や教育の成果を患者さんへ提供していくことも、当診療所の目的としています。

300種類以上の薬用植物が植えられた「薬草園」

渡辺均准教授(環境健康フィールド科学センター)の協力のもと、今年改修を行いました。教育・研究への活用のほか、一般公開もしています。メダカやカエルが泳ぐビオトープも設けています。



ミシマサイコ



オオハナオケラ



トウテイラン



「薬草園の見学だけでも、お気軽にお越しください」と薬剤師たち

ニュース & トピックス

NEWS & TOPICS

外来診療棟に響くハーモニー 院内コンサートを開催

千葉大学合唱団による混声コンサートを7月2日に、ピアノの近藤和花(あえか)さんによる外来診療棟1周年記念コンサートを7月7日に開催。訪れた患者さんは、慣れ親しんだ童謡と一緒に口ずさんだり、やさしいピアノの音色に耳を傾けたり、楽しいひとときを過ごしました。



当院では定期的に院内コンサートを開催しています

子どもから理解広める 認知症キッズワークショップ

認知症の人は孫に会うと「うれしそうにしている」という、認知症疾患医療センターの調査結果などから、「子どもの認知症への正しい理解は重要」と考え、4日間に渡り開催。小・中学生6名が認知症の勉強、認知症の人が暮らすグループホームの訪問、パンフレット作成に挑戦しました。



絵の授業を受けて作った団扇を認知症高齢者にプレゼントしました

医療・介護・福祉の連携を強化! 第9回千葉県地域連携の会 8月5日

県内から400名を超える関係者が集結し、団塊の世代が75歳を迎える2025年問題が10年後に迫った今、どのような準備を進めていくべきかが議論しました。同時開催の高校生向けプログラム「千葉県内で働く医療者になるう」には、35名もの高校生が参加しました。



新人職員・学生に勉強方法などを積極的に質問する高校生



当診療所は患者さんのお体の状況をじっくりと診るため、「予約優先制」です。事前にお電話でご予約ください



生薬を配合し、煎じ薬をつくります



漢方薬の剤形は様々

東洋医学の講座が好評です！

柏の葉・東洋医学健康セミナー

千葉大学柏の葉キャンパスにて、市民公開講座を定期開催しています。今年4回目は9月26日に開催。漢方の歴史から紐解く「医」と「食」の関わりや、漢方医学を活用した健康へのヒントについての講演があり、100名を超える参加者は真剣に聞き入っていました。



質疑応答コーナーでは多くの質問が寄せられ、関心の高さをうかがうことができました(次回は11月28日に開催予定)

安心安全で、衛生的な鍼灸治療を提供



千葉大学柏の葉鍼灸院
院長
まつもと たけし
松本 毅

当鍼灸院は、2006年11月、国立大学法人の日本初の鍼灸院として開設されました。鍼灸治療は近年注目を浴び、世界50か国以上で行われ、WHOをはじめとする様々な機関や国で研究が進められています。これらの情報をいち早く治療に生かし、古典的な治療とともに最新の鍼灸治療を患者さんに提供することを目指しています。また、東洋医学の予防医学の観点から「病気になる前の街づくり」をテーマにお灸のセルフケア

アなども推奨しています。

さらに、子どもの鍼も行っています。関東ではあまりなじみがありませんが、関西方面では昔から子どもの鍼治療が行われており、使い捨ての刺さない鍼を使っています。子どもにとって心地良い、眠くなるような刺激量です。夜泣き、疳(かん)の虫、オネショなどでお悩みの親御さんが利用されています。



子どもの鍼治療時間は10分前後。全身をさするように刺激します

テレビなどでも話題の

医食同源メニュー

千葉大学病院ひがし棟11階にある展望レストラン・ヴァンセーヌでは、和漢診療科の並木隆雄診療教授が監修する「医食同源メニュー」を提供しています。岡部栄シェフ考案の、生姜やサンザシなど漢方薬にも使用される食材を用いたレシピは、漢方独特の臭いなどもなくヘルシーで美味しいと人気です。



食材ごとの効果を書いたメモもお渡ししています

大好評発売中のレシピ本『千葉大学病院の薬膳ごはん』

千葉大学柏の葉診療所／千葉大学柏の葉鍼灸院



〒277-0882 千葉県柏市柏の葉6-2-1

つくばエクスプレス 柏の葉キャンパス駅 徒歩5分

診療所：電話 **04-7137-8471**

(火・水・金 9:00~12:00、13:30~16:30/土 9:00~12:00)

<http://www.fc.chiba-u.jp/hospital/>

鍼灸院：電話 **04-7137-8483**

(月~金 8:30~12:15、13:15~17:15)

<http://www.fc.chiba-u.jp/hari/>

患者さんのための

Q&A

Q インフルエンザワクチンの接種は毎年必要ですか？

A はい、接種は毎年必要です。インフルエンザは冬になると流行が心配されるウイルス感染症ですが、厄介なことに、毎年流行するウイルスが変わるのです。ですからワクチンも、毎年春に流行を予測して作られているので、毎年接種が必要なのです。

接種は原則、小児は2回、成人は1回。アレルギーなどで接種できない場合がありますので、詳しくは医師や看護師におたずねください。ワクチンを接種すれば、症状や程度は軽くなりますが、感染や発病を完全に防ぐことはできません。感染力が非常に強く、くしゃみやせきなどによる飛沫感染や、ウイルスを含む痰や鼻汁に触れた手で口や鼻を触ることによる感染などがありますので、以下の対策も必要です。

<ワクチン以外も対策を>

1) 手洗いをきちんとする

手にウイルスが残りにくくなり、感染の危険性も少なくなります。

2) うがいをして喉を湿らせる

ウイルスは乾燥に強く、湿気に弱いので、うがいはとても大事なことです。

3) マスクを着用して飛沫感染を予防する

飛沫は1~2m程度飛散します。人混みの中など、必要なときに適切にマスクを着用してください。

4) 体調を整える

健康的な食事と規則正しい生活、適度な運動と十分な休養で、基礎体力の維持・向上を！



感染制御部 さくらい たかゆき
櫻井隆之

NK4分子でがん細胞を抑える! 世界初の研究が始まっています

治療法が確立されていない「悪性中皮腫」に対し、がん細胞の増殖抑制が期待されるNK4遺伝子を用いて治療する臨床研究に取り組んでいます。

アスベストなどが原因とされる「悪性中皮腫」を治したい

肺や心臓などの臓器は、それぞれ胸膜や心膜といった膜で包まれています。この膜の表面「中皮（ちゅうひ）」にできるがんが「悪性中皮腫」です。

悪性中皮腫の多くを占めているのが、胸膜の中皮に発生する「悪性胸膜中皮腫」です。アスベスト（石綿）を職業的に扱ったことがその原因と考えられており、胸水がたまることで呼吸困難などの症状を引き起こします。しかし、確立された治療法はまだ少なく、多くの患者さんは抗がん剤治療を受けているのが現状です。

そこで、呼吸器内科では新たな治療法開発を目的に、今年8月に世界で初めて「NK4遺伝子を用いた悪性中皮腫の臨床研究」を開始しました。

NK4分子は細胞の増殖を担う分子と構造が良く似ており、正常な細胞を傷つけずにがん細胞の増殖を阻害するほか、がん全体の栄養供給も抑制する効果が期待されています。治療法としてはNK4遺伝子を、病原性を取り除いた安全なアデノウイルスを使ってがん細胞まで運び、合成されるNK4タンパク質分子でがん細胞の機能を低下させます。

当院ではこのNK4分子の持つ機能に着目し、将来的には、がん細胞を死滅させることができる治療法を目指しています。



呼吸器内科
講師
ただゆうじ
多田裕司

千葉大学大学院
医学研究院
分子腫瘍生物学 客員教授
たがわまさとし
田川雅敏

多田裕司 / 1992年、岡山大学医学部卒業。2014年4月より現職。学生時代は柔道部で活躍。「自転車、バイク、車、電車、飛行機、何かに乗って移動している時間が好き」
田川雅敏 / 1979年に千葉大学医学部卒業後、スタンフォード大学医学部研究員などを経て、2005年より現職。趣味は美術館めぐり。

NK4遺伝子を用いてがん細胞の増殖を阻止!



アデノウイルスは、遺伝子を運搬する役割を果たします。もともと持っていた病原性のタンパク質遺伝子は取り除かれ、安全にNK4遺伝子を細胞まで運びます

NK4遺伝子が細胞に注入されることで、NK4タンパク質を放出し、がん細胞が増殖することを阻害します

長年のオールジャパン体制での研究 早期の実用化を目指して

これまで千葉大学では、大阪大学・金沢大学・神戸大学・東京女子医科大学・東邦大学と共同研究を実施し、いわばオールジャパン体制で、NK4遺伝子を用いた治療の臨床開発を進めてきました。

NK4遺伝子を用いた悪性中皮腫の治療は患者さんへの負担が少ないため、研究が進めば、通常の治療を受けている患者さんに併用したり、従来の治療法を実施できない患者さんにも治療を行うことが可能になるのでは、と期待されています。将来この研究成果を、より多くの方の治療に役立てることができるよう、日々努力をしております。

私の アウト の フ イ

折り紙で人を笑顔にしたい

私は薬剤師として働いています。内服薬や注射薬の準備や、院内外からの薬に関する問い合わせへの対応、入院されている患者さんへのお薬の説明などを行っています。日々勉強も含め、やりがいのある毎日です。

特技は折り紙です。幼少の頃から興味があり、何時間もかけて複雑なものを折っていました。自分の技術的な追求もいいですが、今は周りの人に喜んでくれたときにうれしく感じます。知人のお子さんに配ったり、リクエストに応じて折ったり、好きな動物の折り方を教えてあげたり。稀に、折り紙好きの患者さんと、(薬の説明はしつつも)「和紙で折ると……」など、紙へのこだわりで盛り上がることもあります。患者さんからいただいた作品は今も大切にしています。



ステゴサウルスは自信作です

薬剤部 薬剤師
うちだまさし
内田雅士

働く 現場日記

視力の弱い患者さんの 力になりたいです

たなか ゆみ
眼科 視能訓練士 田中優未

視能訓練士は、あまり聞き慣れないかもしれませんが、医師の指示のもと眼科全般の検査を行う医療技術者です。治療時や手術前の視能検査をはじめ、弱視や斜視の訓練治療にも携わっています。

当院で視能・視力検査を受けられる患者さんとはご高齢の方が多く、聞こえにくい患者さん多いので、コミュニケーションには細心の注意をはらっています。また、弱視のお子さんが来院されることもあり、訓練によって視力が改善し、喜んでくれている様子を見たときなどは、とてもうれしい気持ちになります。

将来的には、保持されている視力や視野を効率よく使って少しでも見やすい環境を作る「ロービジョンケア」に力を入れたいと考えています。今後もより知識を身につけ、弱視の方たちのお役に立てればと思います。

患者さんに合わせた
対応を心がけています



あとがき

外来診療棟のフルオープンから3カ月、いのはな山の樹々も少し秋めいています。「ゆったりできて、待つのが苦ではなくなりました」といったお声をいただくことがあり、安堵の思いです。最近、家族の立場で「病院」というものに接することがあり、入院療養の環境や病院で働く人々の存在の大きさを実感する機会を得ました。患者さんが安心して治療に臨めるよう、院内の連携を深め、お手伝いをしていきたいという思いを新たにしています。

【いのはなハーモニー】43号 発行日 2015年10月16日
発行 千葉大学医学部附属病院
〒260-8677 千葉県千葉市中央区玄鼻1-8-1
TEL 043-222-7171(代表) <http://www.ho.chiba-u.ac.jp/>
※ホームページでバックナンバーがご覧いただけます